『支那城郭ノ概要』—著者石割平造氏の経歴と長安・洛陽部分解説—

角山典幸

はじめに

一九三七（昭和一二）年の盧溝橋事件から一九四五（昭和二〇）年の日本の連合国への降伏まで、中国大陸では日中両国の全面戦争—日中戦争—が繰り広げられていた。その最中、一九四〇（昭和一五）年一二月に支那派遣軍総司令部によって『支那城郭ノ概要』が刊行された。本文二六五頁、図版一四三枚に及ぶ大著を執筆したのは、工兵少佐の石割平造氏である。本書は、華北・華中における城郭都市一〇一箇所[1]の構造・規模・沿革などをまとめたもので、石割氏の実地調査に基づく城郭の詳細なデータが示される。言うまでもなく、本書は城郭都市を占領・支配するという軍事的要請に応えて編まれたものであるが、現在では城郭都市の構造や規模を研究する資料としての価値が高まっている。

本書の内容は軍事機密に属すため、印刷数は限られていたようである。現在本書を所蔵する国内の図書館は、国立

国会図書館、国立を中心とするいくつかの大学図書館、東洋文庫などである。[2] このように、本書を所蔵する機関は限られているが、香港の中文大学が一九七九年に英訳を刊行したことで容易に内容を知ることができるようになった。[3] また、国立国会図書館は、明治時代以降に刊行された図書・雑誌のデジタル化を進め、〝国立国会図書館デジタルコレクション〟としてインターネット上で公開している。『支那城郭ノ概要』もその対象になっており、デジタルコレクションのホームページで全頁の画像を見ることが可能となった。[4]

このように、本書を閲覧する環境は整ってきたのだが、関係文献は少なく、前述の中文大学英訳本に石割氏の略歴と本書の概要が記されるほかは、管見の限り愛宕元氏と川勝守氏が論述しているに過ぎない。愛宕氏は、その著書『中国の城郭都市 殷周から明清まで』の中で、『支那城郭ノ概要』に情報が載せられる一〇一箇所の城郭都市から一二箇所の図を選んで紹介することで、明清時代の城郭都市の形体を説明している。[5] また、「石割平造著『支那城郭ノ概要』 旧陸軍軍人の目を通して見た中国の城郭都市」では、本書の内容を紹介し、石割氏が中国大陸の城郭都市の概要を述べた「総説」部分を詳細に解説している。[6] 川勝守氏は、「中国城郭都市の都市空間の実測データ」で本書収載の城郭図を掲げ、城郭都市の規模、城壁・城門の構造等に関わるデータを提示している。[7]

関係論著が少ないとはいえ、中文大学英訳本と愛宕・川勝両氏によって本書の紹介と解説は既になされている観があり、本書について論じるのは屋上屋を架す嫌いがある。ただ、石割氏の経歴についてはなお補うべき点が存し、幾多の将校の中から石割氏が著者に選ばれた理由についてもこれまで検討されたことがなかった。また、愛宕氏が解説したのは「総説」部分のみで、個別の城郭都市に対する石割氏の叙述について解説が加えられたことはなかった。そ

れゆえ、本書が個別の城郭都市に対する研究に十分に活用されてきたとは言い難い状況にある。そこで、小論では石割氏の経歴を辿り、本書を著すに至ったいきさつを探りたい。そのうえで、本書に掲載される城郭都市から長安と洛陽を選び、解説を加えたい。長安・洛陽を考察の対象とするのは、両者が唐までの中国史における二大古都であったためである。

一　本書の内容

著者の経歴などを検討する前に、本書の内容を確認しておきたい。全体の構成は大きく二篇に分けられる。第一篇は、愛宕氏が解説した「総説」で、第二篇は「各地城郭」である。以下に目次の主要部分を掲げる。なお、原文は旧漢字片仮名表記であるが、常用漢字平仮名表記に改めた。

緒言

第一篇　総説

第一章　築城の種類及其の編成

第一節　長城

第一款　上古の長城

第二款　現存の長城

第二節　局地築城
第一款　都市築城
第二款　特種築城
第三款　現存都城の概観
第三節　支那城郭と我国築城との関係
第二章　築城素質
第一節　城壁
第一款　壁の断面
第二款　女牆
第三款　築城材料
第二節　外壕
第三節　城門
第一款　城門の数
第二款　城門の種類及其の構造
第三款　城門附属設備
第四節　馬面（馬面戦棚）

第二篇　各地城郭

第一章　北支の城郭

第一節　河南省の城郭

西安・霊宝・陝県・洛陽・中牟・開封・睢県・帰徳・陳州・周家口・郾城・信陽・光州・汝寧・衛輝・彰徳

第二節　山西省の城郭

太原[8]・汾陽・沁県・長治・沢州・臨汾・太平・絳州・侯馬鎮・聞喜・運城・大同

第三節　河北省の城郭

北京・通州・滄県・徳州[9]・保定・定県・正定・獲鹿・順徳・邯鄲・大名

第四節　山東省の城郭

徳県・青州・博山・済南・長清・泰安・寧陽・兗州・鄒県・済寧・金郷・滕県・沂州・単県・嶧県

第二章　中支の城郭

第一節　江蘇及北部浙江省[10]の城郭

南京・勾容[11]・鎮江・揚州・丹陽・金壇・常州・無錫・蘇州・崑山・常熟・太倉・嘉定・宝山城・松江・宜興・蕭県・泗県・宿遷・邳県・嘉善・嘉興[12]・杭州・湖州

第二節　安徽省の城郭

寧国・当塗・滁県・盧州・安慶・亳県・正陽関・蒙城・鳳陽

第三節　広西省及武漢地方の城郭

九江・星子・都昌・徳安・安義・瑞昌・萍郷・吉安[13]・武昌・漢陽・応城・安陸・襄陽・長沙

右に掲げた目次によって本書のおよその内容を知ることができる。いま少し詳しく言えば、第一篇「総説」では長城から説き起こし、城郭都市全般について解説を加え、「特種築城」すなわち山上に構築された防衛のための砦などについても解説している。また、城壁や城門・城壕など城郭を構成する施設についても、構造・規模・材料を説明している。第二篇「各地城郭」では、華北から華中にかけての城郭都市一〇一箇所の構造を、平面図や城壁の断面図を駆使して説明している。また、城郭全体の規模はもちろん、城壁の厚さや城門・甕城（おうじょう）・女牆（じょしょう）の規模、城壕の幅や深さなどのデータを提示している。さらに、城郭都市の沿革も解説しており、これらの都市の中には、明清時代に遡り得るものが多数あることが示される。

二　石割氏の経歴と本書執筆の経緯

本書が城郭都市の構造を的確に把握し、詳細なデータを盛り込んでいることは、一見して明らかであり、これまでの論著で説かれてきたところである。このような資料を作成することのできた石割平造氏とは、どのような人物であったのだろうか。また、石割氏その人が本書を著したいきさつは、どのようなものだったのだろうか。以下に検討したい。

石割平造氏は、一八八四（明治一七）年一二月生まれで、富山県の出身である。名古屋幼年学校、中央幼年学校を経て陸軍士官学校に入学し、一九〇五（明治三八）年三月に第一七期生として同校を卒業した。その後の経歴を年表にまとめると次のようになる。[14]

一九〇五（明治三八）年四月	工兵少尉・工兵第九大隊付
一九〇七（明治四〇）年一二月	工兵中尉に進む
一九〇九（明治四二）年一一月	陸軍砲工学校卒業
一九一二（明治四五）年二月	技術審査部付
一九一三（大正二）年一二月	陸軍大学校入学
一九一五（大正四）年八月	工兵大尉に昇進
一九一六（大正五）年一二月	陸軍大学校卒業。工兵第九大隊中隊長に就任
一九一七（大正六）年九月	参謀本部付
同年一二月	近衛師団参謀に就任
一九二〇（大正九）年二月	陸軍砲工学校教官に就任
同年六月	参謀本部勤務
一九二一（大正一〇）年八月	工兵少佐に昇進
一九二二（大正一一）年二月	広島湾要塞参謀に就任

一九二三（大正一二）年三月　予備役
一九三八（昭和一三）年五月　召集を受け、第一師団後備工兵第二中隊長に就任
一九三九（昭和一四）年五月　中支那派遣軍参謀部付
一九四一（昭和一六）年一〇月　陸軍工兵学校教官
同年一二月　中佐に昇進
一九四二（昭和一七）年五月　参謀本部付（本邦戦史編纂部勤務）
一九四五（昭和二〇）年一〇月　召集解除
同年一二月　第一復員省史実部付
一九五二（昭和二七）年一二月　死去

年表を通観すると、石割氏が陸軍の中で技術畑を歩んできたことが、容易に見て取れるであろう。また、石割氏が城郭都市を調査した時期についても、本書が一九四〇（昭和一五）年一二月の刊行であることを踏まえれば、一九三八（昭和一三）年五月の召集から一九三九（昭和一四）年五月以降、中支那派遣軍参謀部付として大陸に出征していた頃までであったと予想がつく。石割氏が召集を受けて中隊長に就任した第一師団後備工兵第二中隊は、第一一軍司令官の指揮下に入っており[15]、第一一軍は「中支作命甲第百二十五号　中支那派遣軍命令」（一九三八《昭和一三》年一〇月二四日）で、「三　第二軍及第十一軍ハ別紙要領ニ準拠シ武漢三漢ニ進入スヘシ」と命令を受けている[16]ように、武漢三鎮（現在の湖北省武漢市）を攻略している。したがって石割氏は、やはり第一師団後備工兵第二中隊長に就い

た一九三八（昭和一三）年五月以降、城郭都市を調査したと考えられる。

それでは、石割氏が従軍した地域はどこであったのだろうか。中文大学英訳本及び愛宕氏は一九三八（昭和一三）年の武漢・南昌作戦に加わったとしている。[17] 武漢を攻略したことは右に掲げた史料から明らかである。また、南昌（現在の江西省南昌市）を攻撃したことも指摘の通りである。[18] ただ、石割氏の従軍地はもう少し跡付けることができる。一九三八（昭和一三）年一一月一六日の『読売新聞』第二夕刊の第二面に、「珍らしや〝錦鶏鳥〟戦線から本社へ寄贈」という見出しの記事があり、そこには次のように記される（中略部分には、石割氏の当時の住所が記載されているので削除した。また、原文に振られているルビは省略した）。

九江陥落後同所に駐つて橋梁の架設、道路の改修等戦後の復興工作に奮闘してゐる石割平造部隊長（……）から正力本社長あてに珍らしい錦鶏鳥を寄贈された、これは去月廿五日同隊の一部が武昌に突入せんとした際その二、三里の手前で捕獲した野生のもので……

この記事は、石割氏の部隊が武漢三鎮の一つである武昌に突入する直前に捕えた錦鶏鳥を、読売新聞社の正力松太郎社長に寄贈したことを伝えるもので、錦鶏鳥を抱く石割氏の写真も添えられている。特派員が九江（現在の江西省九江市）より発したこの記事によれば、石割氏は一九三八（昭和一三）年一一月頃、戦闘で破壊された九江の橋梁の架設、道路の改修などに当たっていたという。石割氏所属の第一一軍が九江を攻略したことは、「呂集作命第九号」（一九三八《昭和一三》年七月一九日）[19] で裏付けられ、なおかつ作戦開始が七月であったことが判明する。石割氏は、一九三八（昭和一三）年の武漢・南昌作戦のほか、同年七月から九江の攻略に従っていたのである。

九江における石割部隊の橋梁架設・道路改修は、年をまたいだ一九三九（昭和一四）年になっても続いていた。同年二月九日付の『読売新聞』夕刊第二面（神奈川県版）に「進む興亞の建設」なる記事が掲載されており、そこに、

九江の市街を流れて揚子江に注ぐ龍開河にいま石割部隊の工兵さん達が毎日架橋作業をやつてゐる、もとこゝに懸つてゐた愛民橋は昨年七月末皇軍が九江に入城した際敵兵が破壊してしまつた、……石割部隊の工兵達は正月といつても元日一日休養したゞけで二日から道路の補修に橋梁の架設に出動し大陸建設の礎となつて働いてゐるのだ

と記されている。

このように、石割氏は一九三八（昭和一三）年五月に召集を受け、七月に九江を攻略した。九江陥落後、石割氏は当地に留まり、およそ一一月から翌年二月にかけて橋梁架設・道路改修に当たったと見られる。その後は、既に述べたようにその年の五月に中支那派遣軍参謀部付となり、一九四〇（昭和一五）年一二月に本書を上梓している。

石割氏の大陸における軍務の遂行状況に鑑みれば、氏は出征時の多くの期間を華中で過ごしたことが分かる。しかし、本書には、前章で紹介したように実地踏査に基づいたと思われる華北の城郭都市の詳細な図が掲載されている。この事実については、石割氏自身が本書の「緒言」で次のように述べている。

然レトモ在任地ハ殆ント中支ニ限ラレ支那文化發生地タル北支方面ニ於テハ二、三ノ城郭ヲ見タルニ過キサルノミナラス中支ト雖未タ足ヲ入レサル所尠カラス、

これにより、石割氏が華北の城郭都市のいくつかを訪れ、自身で調査したことが分かる。ただ、華中の諸都市を攻略

した第一一軍に所属する石割氏が、華北の城郭都市を踏査した経緯が疑問点として浮上する。この点については、鳥羽正雄氏による、戦時下日本における城郭の状況についての解説が手がかりとなる。鳥羽氏は次のように述べる。

石割平造氏は中支に出動して一部隊長となつたが、その後、北支軍の命により、支那の主要城郭を調査して、その成果を北支軍から發行した。[20]

これにより、石割氏が北支那方面軍の命令を受けて華北の城郭都市を踏査したことが判明する。

先に掲げた「緒言」の文ではまた、石割氏が自分の職務担当地域に当たる華中ですら、調査する機会のない都市が少なくなかったとしている。これを受けて「緒言」の文は、次のように続けられる。

故ニ未踏地ノモノハ地圖又ハ聞知ニ依リ集メタルヲ以テ此等諸城ハ經始、住民地、障碍物トノ關係等ノ概要ヲ觀察シ得ルモ築城研究ノ重要素タル素質ニ關スル資料ハ未タ十分ト云ヒ難[21]ク尚將來ノ研究ニ待タサルヘカラサルモノアリ

石割氏が実見できなかった城郭都市については、地図や伝聞情報に拠ったという。このため、平面図のみ収録され、城壁断面図、城門の図などの詳細図が添付されない都市が生じる結果となったのであろう。

ここまでの検討で、大陸における石割氏の活動状況がおぼろげながら見えてきた。そこで、次に取り上げたいのは、何ゆえ石割氏が華中の城郭都市の調査担当者となり、さらに華北の都市をも調査することになったのかという問題である。

この問題を考えるには、石割氏が予備役であった時期、すなわち一九二三（大正一二）年三月から召集を受けた一

九三八（昭和一三）年五月までの活動を振り返る必要がある。

当該期の石割氏の動静は詳らかでないが、一九三三（昭和八）年三月に陸軍省内に発足した本邦築城史編纂委員会に所属し、日本各地の城郭の踏査に従事していたことが知られている。委員会は、一〇年計画で調査を進めると共にその成果の刊行を目指した。調査報告書の構成は、第一部を通史、第二部を全国に散在する城郭の調査報告、第三部を江戸時代末以降の海岸要塞の調査報告とした。ただ、事業は一〇年で終わらず、一九四五（昭和二〇）年に中止された。さらに、同年五月の東京大空襲で報告書の原稿を焼失した。ところが幸いなことに、石割氏らによる控がその手許に残されており、『日本城郭史資料』のタイトルで国立国会図書館に架蔵されることとなった。[22]

石割氏は、一九三三（昭和八）年の委員会創設当初からのメンバーで、身分は嘱託であった。この点は、石割氏と同様に嘱託として委員会に所属した鳥羽正雄氏が収集した城郭関係資料（兵庫県立歴史博物館所蔵〝鳥羽正雄コレクション〟）の一つ「本邦築城史編纂業務要領」（一九三三《昭和八》年一一月）第四章「業務ノ分担及進度予定」第一「業務ノ分担」によって知ることができる。そこには、

一、史料ノ蒐集、調査、研究及起草ハ主トシテ石割嘱託ニ任スルモ其ノ一部ヲ築城部本部部員又ハ他ノ嘱託等ニ□任セシムルコトヲ得

とある。[23] 堀田浩之氏はこの記述により、石割氏が史料の「蒐集」から「調査」「研究」、そして「起草」まで中心となって行っていたとしている。[24] また、元委員の中山光久氏の手記には、

執筆分担は、第一部通史を陸大出の石割平造氏、第三部近世要塞編を築城本部の難波恭一氏が担任し、第二部を

小生が担任することになった。

とあり[25]、石割氏が第一部の通史を執筆したことが分かる。

ところが前述のように、事業は当初計画の一〇箇年で完了しない見込みとなった。堀田浩之氏は、「本邦築城史編纂委員会業務概況」（一九四二《昭和一七》年八月）に、遅延の理由が列挙され、調査内容・地域の拡大、資料収集の難航と共に、

編纂主任者ノ応召セラレタルコト

が挙げられていることを指摘し、石割氏の応召が事業遅延の大きな要因と見ている[26]。

右に見たように、予備役時代の石割氏は、陸軍省内の本邦築城史編纂委員会に所属し、日本各地の城郭の調査結果をまとめていた。本委員会において、史料の収集から調査・研究、原稿の執筆まで中心となって行っていたのが、石割氏であった。それゆえ、石割氏がメンバーから外れると、事業は遅延したのである。

召集前の国内における活動を踏まえれば、石割氏が中国大陸の城郭都市の調査を担当した理由もおのずと明らかであろう。石割氏には、日本の城郭に対する調査・研究の実績があった。このため、中国大陸の城郭都市を攻略・支配するための調査に任じられたと考えられるのである。

三　『支那城郭ノ概要』長安・洛陽部分解説

この章では、本書に掲載される城郭都市のうち長安と洛陽について解説を加える。周知のように、長安と洛陽は、唐以前の中国史における二大古都であった。殷から唐までの約二千五百年間、長安と洛陽は繰り返し都とされてきたのである。当該部分の石割氏の叙述に解説を加えることで、本書を長安・洛陽の研究に供したい。

なお、長安・洛陽の部分は、第二篇「各地城郭」に属し、タイトルに続けて本篇全体の説明がなされる。小論では利用の便を考慮し、この記事も収録した。長安・洛陽それぞれの記事の直後には城郭図が附されるが、小論ではレイアウトの都合上、まとめて記事全体の末尾に移した。また、第一章で述べたように、本書の原文は旧漢字片仮名表記である。ただ、それでは読みづらいことから、常用漢字平仮名表記に改めたうえ仮名には濁点を補った。句読点は、読みやすさを考慮して改めた箇所や補った箇所がある。距離を表す量詞の「粁」は、「キロ」に改めた。

第二篇　各地城郭

前篇に於て支那築城に関し概要を述べたり。本篇に於ては尚一歩を進めて各城郭毎に其の経始、断面及沿革の概要を述べ、以て築城研究の参考たらしめんとす。

集録せし諸城は西安、長沙を連ぬる線以東の地域に在るものの中、有名なるもの或は特種のものを地方別に分類し、地方色の比較を容易ならしむ。

諸城郭には沿革を添附す。首都たりし大都城の沿革表は各期間を明瞭ならしむる為、各区劃の長さは年数に比例せしめ、以て年代との関係を知るに便ならしむ。然れども沿革は主として支那地名辞典に拠りたるを以て統治関

係の変遷のみに走り、戦史、築城、出身人物等に関するもの尠く物足らざるの感あり。将来資料と時日とを得ば、之を増補修正するの要あり。

第一章　北支各地の城郭[27]

北支の西部及北部は山岳地帯にして青海及蒙古に接し、南部は黄河の大平原にして東部に山東の群山蟠踞す。黄河流域平野は所謂中原逐鹿の地にして北狄亦常に之を窺い、匪賊の横行亦甚だしく、為に長城を築設するの外、都市築城も壮大なるものを構築し、且つ村邑部落等に至る迄築城を施せるを見る。

第一節　河南省の城郭

河南省は東は山東平野に連り、南は広漠たる平原にして西は秦嶺及大巴山脈に及ぶ山地を形成し、北は黄河を以て境とするも一部黄河以北に突出す。古来本省は陝西省の長安と共に中原の地として王朝興亡の中心地たり。殷は之を中心として建国し、周は陝西及河南の地に跨りて天下を統べ、漢亦始め陝西に、次で河南に都して天下に王となり、三国の魏、西晋共に洛陽に都し天下に号令せしも、東晋の南遷後は五胡十六国争乱の巷と化したり。然るに後魏の北支を統一し、都を洛陽に定むるや、再び王畿の地となれり。隋唐も亦長安に都したるも、五代に至り汴京即ち開封を首都となし、[28]北宋亦汴に都し、繁栄を極む。金北宋を滅ぼすや、以後河南の地は首都を他に遷され、金、元、明、清皆北京を都とせるを以て再び古の洛陽、汴京等の繁栄の都市を有せざるに至りしも、匪

賊の防禦、河水氾濫の防止等の為の都市の城壁は相当高くし、都城外遠くに氾濫を防ぐ外壁を設くる等、築城施設亦見るべきものあり。

陝西省に在る西安城の研究も序に本節にて説明し、以て城郭変遷の状を明瞭ならしむ。

陝西省の関中

西安は陝西省に在り、此の地方を往時関中と云う。関中は渭水盆地にして東は黄河の激流及其の南方の山地に依り、山西省及河南省に界し、南は秦嶺の大山脈あり、西は甘粛省の六磐[29]山脈に至る間山岳重畳し、北は楡林の山地[30]あり、其の間若干の隘路ありて関外と通ず。即ち東に潼関及有名なる函谷関の難関あり、西に散関、南に武関、北に蕭関ありて四方を閉塞す。斯の如き険要の地なるを以て古来帝都の所在地として天下第一と称せられ、上古より唐に至る間、帝都として此の盆地を屢々利用せらる。

西安（長安）沿革

西紀	時代	首都	変遷
前一一二二[32]	西周	武王都して鎬京と云い、西周の都たり[33]	禹貢の雍州の地[31]

七七〇	東周	周遷都の後、秦に属す
二二一[34]	秦	始皇帝のとき内史を置き、[35]離宮を設く[36]
二〇六	前漢	漢の五年、都を茲に奠む[37] 元年、項羽、雍、塞二国を分置せしが、漢に併合せらる。[38]五年、長安県を置く。恵帝元年、城郭を築き、五年九月竣工す。[39]今の西安の西北十二キロに当ると云わる。太初元年、京兆尹を置き、十三県を鎮ぜしむ[40]
	新	王莽は常安と改む
	後漢	赤眉の賊茲に拠り、大に荒廃す。[41]光武帝、雍州を置く。後、之を廃して司隷校尉をして長安以下十城を統ぜしむ。[42]袁紹、兵を挙ぐるや、董卓、洛陽より茲に遷都す[43]
後二二〇	三国	魏は京兆尹を改めて太守となし、司隷に属せしむ[44]
二八〇[45]	西晋	晋は初め雍州を置く。愍帝のとき洛陽より茲に遷都す[46]
三一六[47]	東晋	前趙、前秦、後秦等都す[48] 劉聡、[49]苻健、[50]姚萇、[51]相継で之に拠る。[52]赫連勃勃、帝号を僭称するや、長安を南台と改め、其の子昌を置く[53]

四二〇[54]	南北朝	西魏、北周の都	西魏永熙三年（五三四）洛陽より茲に遷都し、京兆尹を置く。[55]後周亦茲に都す[56]
五八一	隋	開皇二年、新都を建つ	関皇[57]二年、竜首源[58]の地に新に皇城を営み[59]、大興府を置き、雍州となす。煬帝京兆尹を復置す[60]
六一八	唐	唐も茲に都す	武徳元年、京兆尹を雍州に、大興県を万年県と改む[61]。開元元年、京兆府となし、二十二県を領せしむ[62]。又、唐初以来京城と称し、天宝以後西京と呼び、至徳元年、中京と改め、宝応元年、五都を定めしとき長安を上都となす[63] 天祐元年（九〇四）、帝、洛陽に移り、朱全忠、長安の設備を舟にて洛陽に移し、以後長安衰微す[64]
九〇七	五代		梁は府を廃して大安軍と云い[65]、後唐は西京兆府と云う[66]。晋は府を止め[67]晋昌軍を置く。漢は永興軍と云い、周亦同じ
九六〇	北宋		宋は京兆府永興軍節度と云い、陝西省の治所となす[68]
一一二七[69]	金		皇統二年、総督府を置く[70]

一二三四[71]	元	元初亦京兆府と称す。中統三年、陝西四川行省を茲に治せしむ。至元十六年、京兆府を改めて安西路総督府となす。皇慶元年、奉元路となす[72]
一三六八	明	洪武元年、西安府となす[73]
一六四四[74]	清	陝西省の首府[75]
一九一二	民国	府を止めて県となす[76]
備考	一、隋、唐時代の人口、百五十万位と云わる[77] 二、西安は陝西省の中央部に在り、黄河屈曲点より西方約一三〇キロに位置す	

西安築城沿革（城郭図第一其一乃至其三参照）

一、漢代の長安城

現今の西安の西北一〇キロに在りしと云わる。[78]

漢の五年、高祖部下将士の反対を顧みず櫟楊[79]（今の臨潼）に幸し、七年宮城成り之に遷る。[80]城壁の高さ約八メートル、周囲約二八キロ、十三の城門を有す。[81]但し自然に発達したる都市に築城せしを以て城郭規正ならず。[82]

前漢末王莽の簒奪、赤眉の賊の掠略等の為衰微せしが、[83]後漢の洛陽遷都後特に衰頽す。

二、隋、唐、代の長安城

隋は現在の西安の位置に王宮及都市計画の下に城郭を造営す。唐も隋の都を踏襲し、三百年の栄華の夢を貪れり。

其の城郭及都市の状態、城郭図第一其二の如し。

三、唐以後の城郭

唐末朱全忠天祐元年（九〇四）長安を破壊し、之を洛陽に運搬す。[84] 同年三月地名を祐国軍と改め、[85] 韓建佑国軍節度使となり在任中長安城の改置を行う。即ち囲郭と宮城とを除去し皇城のみを残し、之に補修を加えて奉元城と称す。[86] 其の方法は皇城の南面と西面との城壁を其の儘利用し、北面は宮城の北牆を除去し、城郭図第一其二の如く変更す。[87]

府城は、明洪武中都督濮英大修繕を加え、城周一三キロ城壁の高さ三丈とし、宏壮なる四門を築く。[88] 東を長楽、西を安定、南を永寧、北を安遠門と名づく。其後城の四隅に角楼を設け、幹線道路の交会点に鼓楼を、又其の北部に鐘楼を設け警備用たらしむ。[89] 嘉靖五年（一五二六）及隆慶二年（一五六八）には城壁の重修を加え、崇禎末年には四門外に郭城を築く。[90] 清朝に至り鐘楼を起点として北は安遠門、東は長楽門に至る間別に城郭を築き、満洲城となし旗人を駐屯せしむ。[91]

洛陽（河南）沿革

西紀	時代	首都	変遷
前一一二二	西周		前一一〇八年、成王茲に王城を築く[92]
七七〇	東周	東周の都	平王東遷して都城となす。城は現在の城の西に在りしが如く之を河南城と云う[93]。前五一九年、敬王河南城内狄泉に居す。其の位置は王城の東にして之を洛陽城と云う[94]。其の大さ東西六里南北九里と称す[95]
二四九	秦		秦は洛陽城を増大す[96]
	前漢		
	後漢	後漢の都	後漢光武帝都す。其の城は秦の洛陽城なり
後二二〇	三国	魏の都	此の時代に至り城郭壮大となり、門十二を有す[97]
二八〇	西晋	西晋の都	
三一六	東晋		匈奴の劉曜に洛陽焚かれ疲弊す[98]
四二〇	南北朝	後魏の都	四九四年、孝文帝平城（大同）より遷都し、洛陽復活す[99]。大さ東西二〇里、南北一五里と云わる[100]。五三四年、後魏東西に分離し、都城は鄴及長安に移る[101]

五八一	隋		大業元年、東京城を茲に営み洛陽河南の二城を併わせ、洛水其の内を貫流する大規模のものとす[102]。外城周囲五二里九六歩、内城周囲一八里二五八歩、宮城九里三〇〇歩と称す[103]
六一八	唐		唐代之を東都と称す[104]
九〇七	五代	後梁及後唐の都	九〇九年、梁開封より都を洛陽に移す[105]。九二三年、李存勗後唐を興し茲に都す[106]。九三六年、其の将石敬糖に滅さる[107]
九六〇	北宋[108]		
一一二七	金		一一三〇[109]、金入寇し復た焚かれ、爾来顧るものなきに至る[110]
一二三四	元[111]		
一三六八	明		明洪武年間、現在の城郭を築き、隋、唐都城の西北隅に存すと云わる。河南府の治所とす[112]
一六四四	清[113]		
一九一二	民国[114]		

洛陽附近地形の概要

洛陽は洛水の河谷に在り、北は黄河、南は河南省の伏牛山脈より流れ来る支脈に依り、山岳重畳し、東及西は上記支脈黄河に迫りて乱岑糾紛す。此の東方に在る関門を虎牢関とす。昔は成皐と云えり。汜水県[15]の西方約一キロに在り。西に在るものは潼関、函谷関の外、澠池附近に三崤[16]の険あり、古来有名なる険関なり。虎牢関、三崤共、洛陽より約九〇キロ隔り、我国の江戸と箱根との距離に略似たり。

城郭圖第一其一

文献ニ依ル唐長安城坊圖

一、城坊諸元

周圍　三八粁[117]

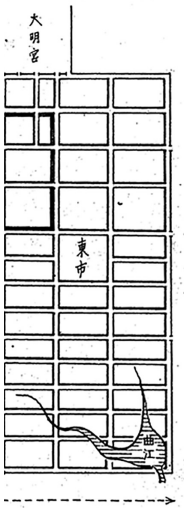
街衢　南北一四街、東西一一街

坊　東西両市ト一一〇坊（坊トハ市街ノ一區劃隋代五ヶ里ト云フ）[118]

各坊ニハ二門又ハ四門アリテ東西貫通、南北貫通ノ二小街ヲ通ス之ヲ巷ト呼フ[119]

二、大明宮ハ太宗カ其ノ太上天皇ノ清暑ノ地トシテ建設シタル永安宮ヲ改稱シタルモノナリ[120]

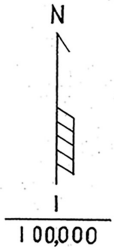
其ノ例ノ梨園ハ玄宗舞曲ヲ教ヘシ處[121]、又興慶宮ハ玄宗離宮ニ改メ其中ノ沉香亭ハ玄宗楊貴妃ヲ從ヘテ詩ヲ徵セラ際李白清平調三章ヲ賦セル處[122]

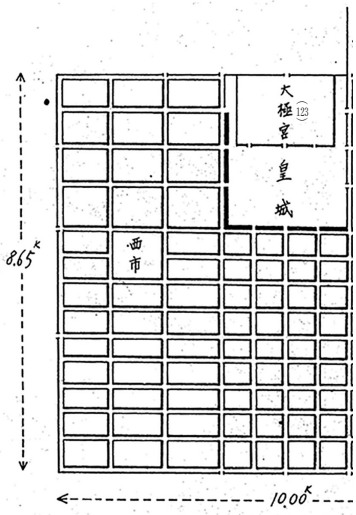


三、長安ノ人口

唐玄宗ノ頃戸數三〇万、人口百數十万[124]

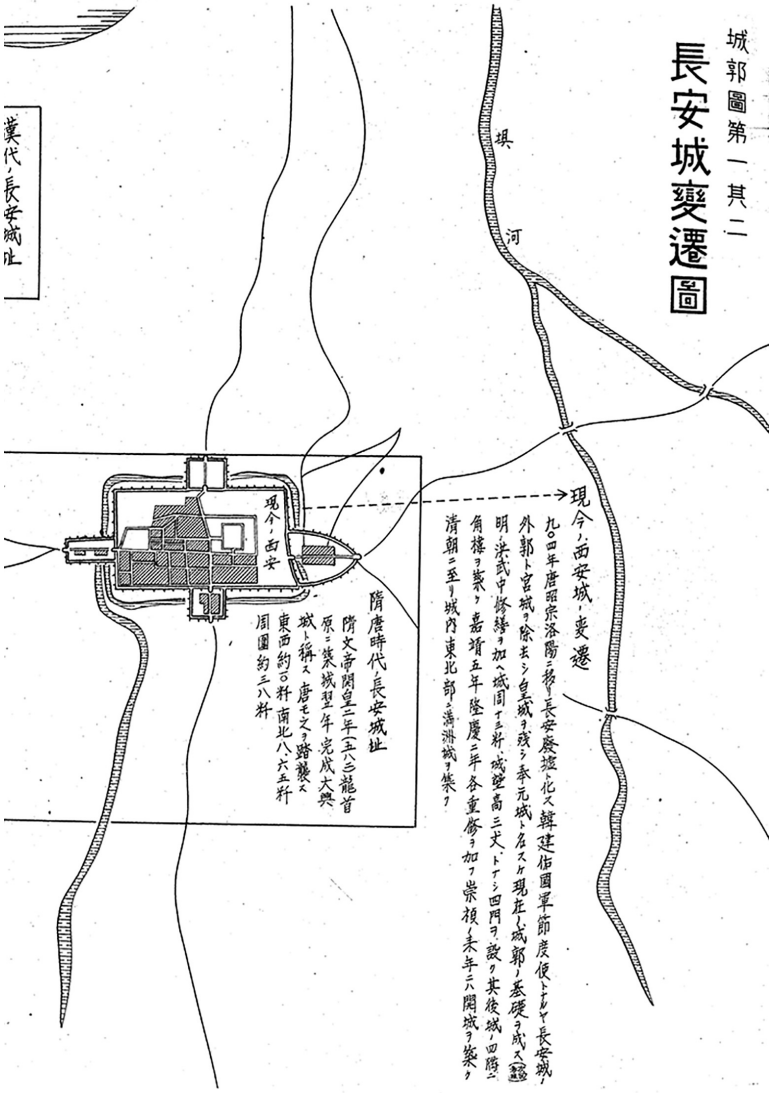
四、唐滅ビ後韓建ノ改築シテ現在ノ西安城ノ基礎ヲナサシメタル經始ノ狀態ハ圖中太黒線ニテ示ス



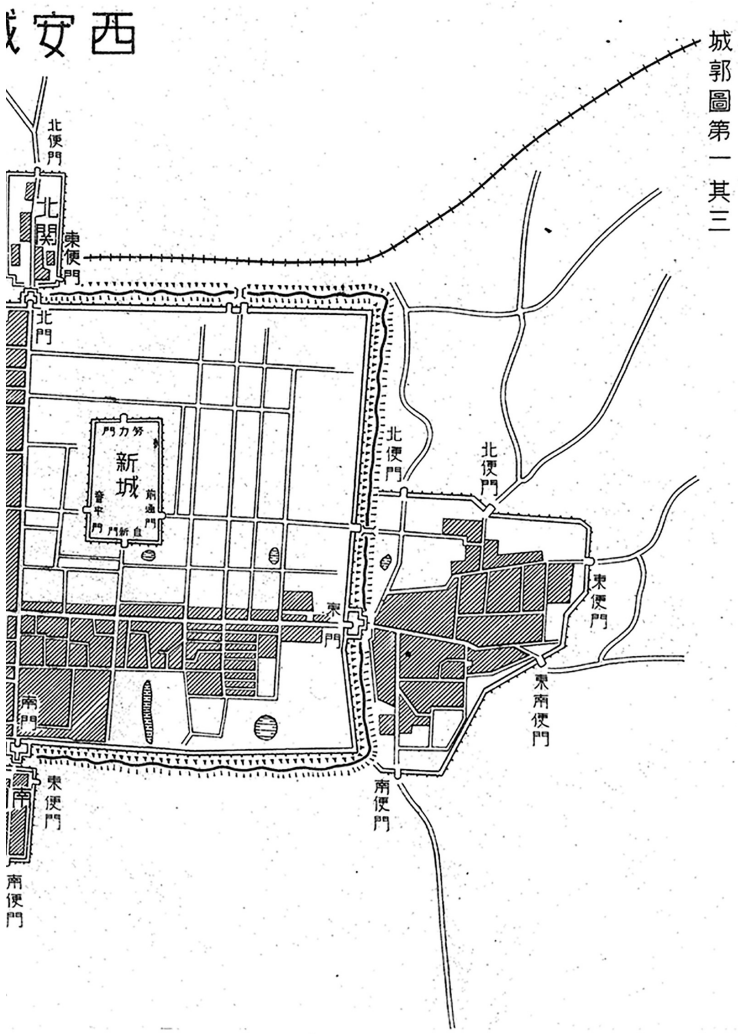


城郭圖第一 其二

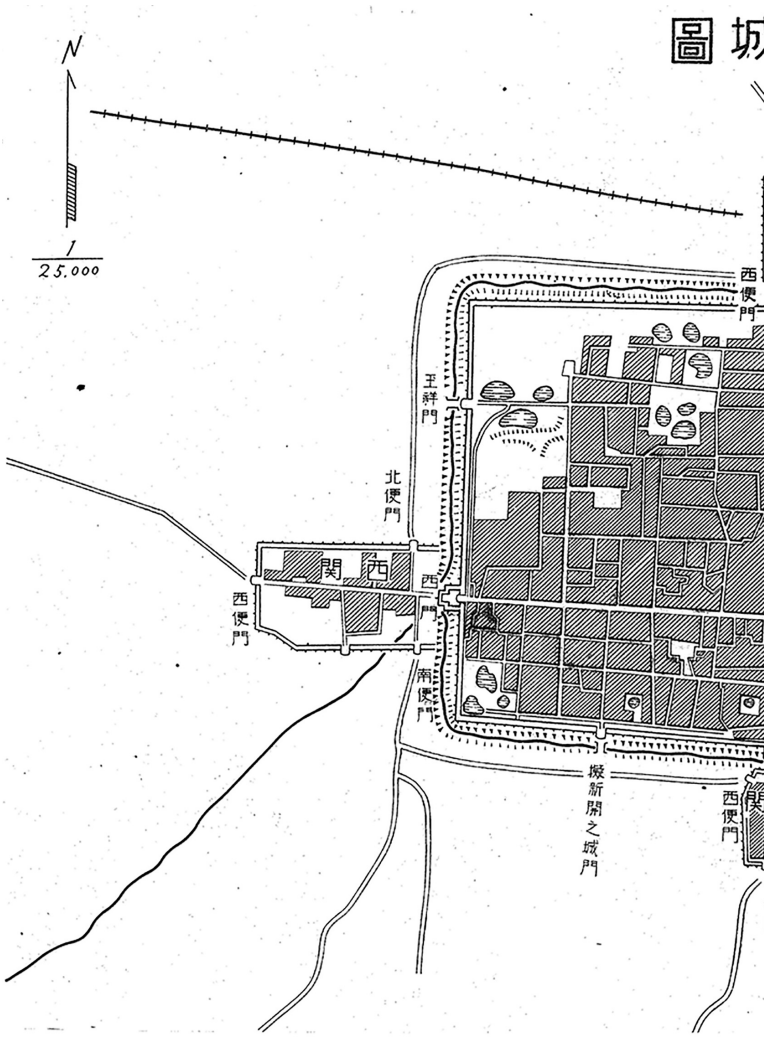
長安城變遷圖



漢五年（前二〇二）築城
七年完了
幅員明瞭ナラザルモ周囲
約二四粁（125）東西六粁
南北六粁十三城門ヲ有シ
壁高八米厚サ上面三ヲ四米
五〇ト三八ル（126）
咸陽縣
渭
水
N
1
100,000

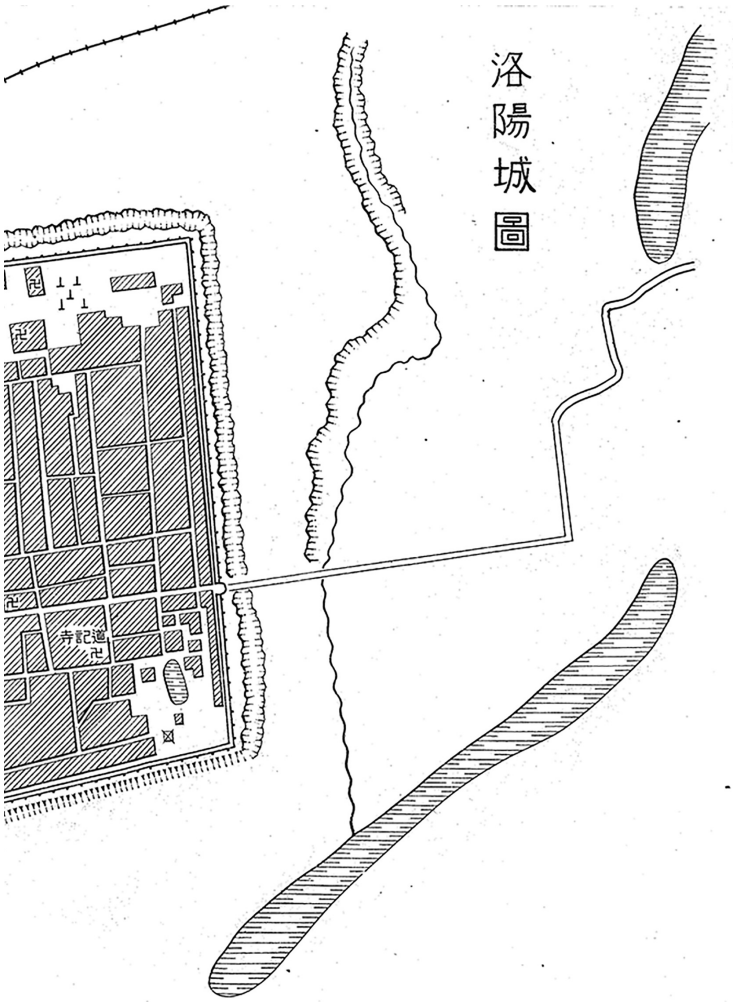


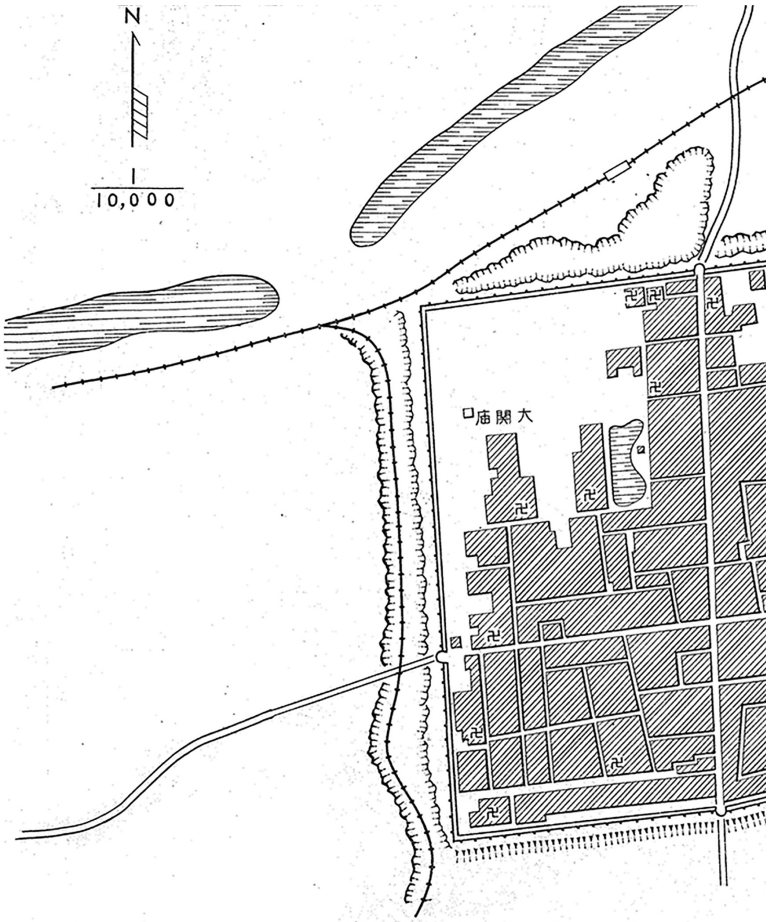
城郭圖第一其三


圖坂
N
1
25,000
西便門
玉祥門
北便門
西關
西門
西便門
南便門
撥新開之城門
西便門

城郭圖第四

洛陽城圖




N
1
10,000
大関廟

おわりに

右に掲げたのが、本書の長安・洛陽に関する部分である。石割氏自身が第二篇「各地城郭」で述べているように、沿革の記述は簡略である。また、中国史の専門家でないがゆえの誤りも散見される。とはいえ、明清時代の城郭に起源を持つ中華民国期の長安城・洛陽城の構造を把握できる重要な資料であることには変わりがない。長安・洛陽を含む中華民国期の城郭都市の構造・規模等をまとめた本書の執筆は、出征前に日本の城郭を調査・研究してきた石割氏でなければ困難であったと思われる。中国における城郭都市の最後の姿の記録として、本書の意義が薄れることはないであろう。

注

（1）目次に掲げられる城郭都市と本文に掲載される城郭都市には出入りがあるが、それぞれの合計数は一〇一である。

（2）東洋文庫の請求記号は、XVI-2-A-2である。なお海外では、香港中文大学・カリフォルニア大学バークレー校に所蔵される。

（3）Benjamin E. Wallacker etc. *Chinese walled cities: a collection of maps from Shina jōkaku no gaiyō* Chinese University Press, Hong Kong, 1979. ただし、本書に転載されている図版は全葉ではない。このため、石割氏の著作の全貌を知るには、原本を見る必要がある。

（4）国立国会図書館デジタルコレクションのホームページのURLは、http://dl.ndl.go.jp/ である。

（5）愛宕元『中国の城郭都市 殷周から明清まで』（中央公論社、一九九一年《中公新書一〇一四》）一九五～二一二頁。
（6）愛宕元「石割平造著『支那城郭ノ概要』 旧陸軍軍人の目を通して見た中国の城郭都市」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第七八集、一九九九年）。
（7）川勝守「中国城郭都市の都市空間の実測データ」（同著『中国城郭都市社会史研究』汲古書院、二〇〇四年）。
（8）目次には記されていないが、本文には太原の後に大谷の記事・図版がある。
（9）徳州は目次だけに掲げられ、本文には掲載されていない。
（10）「浙江省」は誤りで、「浙江省」が正しい。
（11）「勾容」は誤りで、「句容」が正しい。本文では「句容」になっている。
（12）嘉興の項は記事のみで、図版がない。
（13）萍鄉・吉安の掲載順序は、本文では逆になっている。
（14）石割平造氏の略歴は、秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』第二版（東京大学出版会、二〇〇五年）一九頁に依拠した。
（15）「中支作命甲第一号 中支那派遣軍命令」別紙第二「第十一軍司令官ノ指揮下ニ入ルヘキ部隊」（一九三八《昭和一三》年七月一四日）。防衛庁防衛研修所戦史室編『支那事変陸軍作戦〈二〉昭和十四年九月まで』（朝雲新聞社、一九七六年）一一八～一二〇頁掲載。
（16）注（15）前掲『支那事変陸軍作戦〈二〉昭和十四年九月まで』一七九頁掲載。なお、命令文中に「武漢三漢」とあるのは、「武漢三鎮」の誤りであろう。
（17）注（6）前掲愛宕元「石割平造著『支那城郭ノ概要』 旧陸軍軍人の目を通して見た中国の城郭都市」。
（18）「南昌ニ対スル作戦要綱」（一九三九《昭和一四》年二月六日）によれば、石割氏の所属した第一一軍は南昌を攻撃している（注（15）前掲『支那事変陸軍作戦〈二〉昭和十四年九月まで』三五一～三五三頁）。

(19) 注（15）前掲『支那事変陸軍作戦〈二〉昭和十四年九月まで』一二九頁。
(20) 大類伸・鳥羽正雄『日本城郭史』増補版（雄山閣、一九六〇年）七三四頁。
(21) 愛宕氏が既に指摘しているように、「難」の誤り（注（6）前掲愛宕元「石割平造著『支那城郭ノ概要』旧陸軍軍人の目を通して見た中国の城郭都市」）。
(22) 中井均「本邦築城史編纂委員会と『日本城郭史資料』について—敗戦前の城郭研究史を理解するために—」（『中世城郭研究』第七号、一九九三年）。
(23) 堀田浩之「鳥羽正雄と本邦築城史編纂事業について—昭和初期の城郭史研究をめぐる状況—」（『塵界』第一五号、二〇〇四年）。
(24) 注（23）前掲堀田浩之「鳥羽正雄と本邦築城史編纂事業について—昭和初期の城郭史研究をめぐる状況—」。
(25) 中山光久「築城史委員会の想い出」（『歴史読本』第一六巻第五号、一九七一年）。
(26) 注（23）前掲堀田浩之「鳥羽正雄と本邦築城史編纂事業について—昭和初期の城郭史研究をめぐる状況—」。
(27) 目次では「北支の城郭」となっている。
(28) 五代十国時代に華北に興亡した王朝のほとんどは、開封（かいほう）（現在の河南省開封市）のほかに洛陽をも都とした。この現象について久保田和男氏は、五代十国という戦乱の時代に各地の勢力と対決し、傭兵に食糧を支給するには、水運に適した開封を都とするのが最適であったが、当時の観念からすれば、周王朝以来の長い伝統を誇る古都洛陽に都を置くべきであった。そのため、政府が開封に、太廟・郊祀施設が洛陽に置かれるという「分離首都」の状況に至ったとしている（久保田和男「五代宋初の首都問題」同著『宋代開封の研究』汲古書院、二〇〇七年《初出一九八八年》）。
(29) 「六磐山脈」とは、六盤山を指す。
(30) 「楡林の山地」とは、陝西省最北部の楡林市一帯の山地を指すのであろう。『水経注』巻三河水三に、「其水（諸次水）東逕

榆林塞、世又謂之榆林山」とあり、「榆林山」の名が見える。

(31) 『尚書』禹貢には、夏王朝の始祖とされる禹が天下を九州に分けて統治したと記されているが、これは伝説上の事柄である。禹貢の記述に従えば西安は雍州に属すが、あたかも歴史的事実のように扱うのは適切でない。

(32) 紀元前一一二二年は、西周の武王が殷を滅ぼして西周を開いたとされる年である。これは、前漢・劉歆の三統暦に基づく『漢書』巻二一律暦志の記述等によって算出された年代である（能田忠亮・藪内清『漢書律暦志の研究』臨川書店、一九七九年《初刊一九四七年》一四六～一五〇頁）。現在、西周王朝の開創年は、おおよそ紀元前一一世紀後半と考えられているが、紀元前一一二二年説を含め諸説あり、定まっていない。

(33) 鎬京の位置は、漢長安城遺址の南西、灃（ほう）河の東と考えられている。この一帯からは西周時代の瓦や墓が発見されているが、鎬京遺址の全体像はなお不明である。なお、西周王朝成立直前の都である豊は、灃河を挟んだ西側に位置した（徐錫台「論周都鎬京的位置」『陝西師大学報』（哲学社会科学版）一九八二年第三期）。

(34) 紀元前二二一年は秦の始皇帝の二六年に当たり、秦が戦国時代の諸国を滅ぼして天下を統一した年である。

(35) 内史とは、秦の都の咸陽（現在の陝西省咸陽市。遺址は現在の西安市の北に位置する）に置かれた地方行政を司る官で、咸陽及びその周辺を管掌した（鎌田重雄『秦漢政治制度の研究』日本学術振興会、一九六二年、第二篇「漢の郡国制度」第五章「三輔」）。

(36) 「離宮」とは、秦の始皇帝がその三五（前二一二）年に造営した阿房宮であろう（『史記』巻六秦始皇本紀）。阿房宮遺址からは、東西一二七〇メートル、南北四二六メートル、高さ一二メートルの夯土台基が検出されており、前殿の跡と推定されている（中国社会科学院考古研究所・西安市文物保護考古所阿房宮考古工作隊「阿房宮前殿遺址的考古勘探与発掘」『考古学報』二〇〇五年第二期）。

(37) 「漢の五年」とは、前漢高祖の五年で、紀元前二〇二年に当たる。この年、高祖（劉邦）は項羽を滅ぼして帝位に即き、長

安を都に定めた。すなわち、前漢長安城である。ただし、長安奠都の年代を示す史料は、高祖五年と同七（前二〇〇）年の二種が存在する。『漢書』巻一高帝紀・五年五月条は、長安に都した年を高祖五年とし、同書巻二八上・地理志上も長安県を設置した年を高祖五年としている。一方、『漢書』高帝紀の七年二月条には、次のような有名なエピソードが記される。丞相の蕭何が、高祖の許しを得ずに長安に壮麗な未央宮を建てたため高祖の怒りを買ったが、蕭何は、天下が定まっていない今こそ、壮麗な宮殿を作って威光を示す必要のあることを説いた。高祖は喜び、都を櫟陽（現在の陝西省西安市閻良区武屯鎮）から長安に遷したという。また、『三輔黄図』巻一漢長安故城にも、高祖七年に長安の宮城を建設して櫟陽から長安に遷ったことが記されている。これについて佐藤武敏氏は、高祖五年は長安奠都を決定した年で、高祖七年は高祖や百官が長安に入った年と解釈している（佐藤武敏『長安』講談社、二〇〇四年《初刊一九七一年》四一～四三頁）。

（38）前漢高祖元（前二〇六）年、咸陽を攻陥した劉邦は秦を滅ぼした。しかし、その後の主導権を握ったのは項羽であった。項羽はかつて擁立した楚の懐王に義帝の称号を奉り、自らは西楚覇王と称した。また、劉邦を漢王に封じ、関中の雍・塞・翟の三国にも諸将を封じて王とした。劉邦はこれに不満を持ち、その年のうちに関中を平定して三国を併合した（佐竹靖彦『劉邦』中央公論新社、二〇〇五年、二九二～三八五頁）。

（39）前漢長安城の城壁建設工事を恵帝元（前一九四）年着工、同五（前一九〇）年九月竣工としたのは、『漢書』巻二恵帝紀、『三輔黄図』巻一漢長安故城の記述に依拠したと思われる。ただ、既に佐藤武敏氏が指摘しているように、城壁建設工事の着工・竣工時期については史料間に齟齬がある（注（37）前掲佐藤武敏『長安』四四～四六頁）。その内容を以下に掲げる。

（一）恵帝元（前一九四）年正月着工、同五（前一九〇）年九月竣工（『漢書』巻二恵帝紀、『三輔黄図』巻一漢長安故城）、

（二）恵帝元年着工、同六（前一八九）年竣工（『漢書』巻二八上・地理志上）、（三）恵帝三（前一九二）年着工、同四（前一九一）年に半分ができ、六年竣工（『史記』巻九呂太后本紀）、（四）恵帝三年着工、同五年竣工（『史記』巻二二漢興以来将相名臣年表）。なお、前漢長安城に対する考古調査結果については、劉慶柱「漢長安城的考古発現及相関問題研究—

紀念漢長安城考古工作四十年」（中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊・西安市漢長安城遺址保管所編『漢長安城遺址研究』科学出版社、二〇〇六年《初出一九九六年》）等を参照されたい。

（40）京兆尹は、都の長安とその周辺の行政・治安維持を管掌する官である。前漢は、秦の都の咸陽に置かれた内史に倣って長安に内史を置き、後に左内史・右内史に分割した。武帝の太初元（前一〇四）年、左内史を左馮翊に改めて長安の北部地区を治め、右内史を京兆尹に改めて長安及びその東部地区を治めた。また、右扶風を設けて長安の西部地区を治めた。京兆尹・左馮翊・右扶風をまとめて三輔と称す（注（35）前掲鎌田重雄『秦漢政治制度の研究』第二篇第五章「三輔」）。なお、石割氏は、京兆尹の管轄した県の数を一三とするが、『漢書』巻二八上・地理志上に「縣十二」と明記されており、一二県の名を挙げている。

（41）新末に発生した赤眉の乱で農民軍が長安に入城したのは、後漢の建武元（二五）年である（『後漢書』帝紀第一上・光武帝紀上）。この時、長安の宮室・市里は焼かれ、陵は発かれている（『漢書』巻九九下・王莽伝下）。

（42）後漢は全国に一三の州を設置し、長安とその周辺は雍州とされた。後に都の雒陽周辺と雍州を合わせて司隷校尉部に改編した（『後漢書』志第一九・郡国志一、『太平寰宇記』巻二五関西道一・雍州一、程幸超『中国地方行政制度史』四川人民出版社、一九九二年、六五～六七頁）。「司隷校尉をして長安以下十城を統ぜしむ」とは、『後漢書』志第一九・郡国志一に京兆尹管轄下の県が「十城」の表現で示されており、これを指すと思われる。なお、後漢の都の呼称については、『後漢書』に「洛陽」と「雒陽」の二種の表記がある。ここでは『後漢書』郡国志一に従って「雒陽」と表記する。

（43）初平元（一九〇）年、献帝を擁立して政治権力を握っていた董卓に対し、袁紹を盟主とする反董卓連合が結成され、都の雒陽に向けて進軍した。このため、董卓は雒陽を脱出し、献帝を奉じて長安に遷都した（『後漢書』帝紀第九孝献帝紀）。

（44）黄初元（二二〇）年の曹魏建国に伴い、長安の地方行政制度は改められ、後漢時代の京兆尹は京兆郡とされて京兆太守が治め、左馮翊・右扶風は馮翊郡・扶風郡とされた。また、京兆郡・馮翊郡・扶風郡の三輔は司隷校尉に所属した（『晋書』

巻一四地理志上・雍州、『宋書』巻三七州郡志三・雍州）。なお、魏晋南北朝時代の長安の状況については、窪添慶文「魏晋南北朝時期の長安」（東洋文庫中国古代地域史研究班編『水経注疏訳注』渭水篇 下、東洋文庫、二〇一一年）を参照されたい。

（45）二八〇年は西晋の武帝の太康元年に当たり、西晋が呉を滅ぼして天下を統一した年である。

（46）西晋末に発生した永嘉の乱で、都の洛陽は匈奴の劉曜に奪われ、拉致された懐帝は殺害された。これを受け、長安にいた愍帝が建興元（三一三）年に即位した。しかし、この頃の西晋は、長安とその周辺を支配する地方政権でしかなく、匈奴に攻め込まれた愍帝は建興四（三一六）年に降伏し、西晋は滅亡した（福原啓郎『西晋の武帝 司馬炎』白帝社、一九九五年、三一六～三二〇頁）。

（47）前注で述べたように、建興四（三一六）年は西晋滅亡の年である。東晋建国の年は、建武元（三一七）年である。

（48）西晋の滅亡後、これを継承する東晋が建康（現在の江蘇省南京市）を都として建てられ、華北には五胡と呼ばれる非漢族による諸政権が興亡した。前趙・前秦・後秦は、非漢族の建てた国である。

（49）前趙は光初二（三一九）に長安に遷都しているが、この時の皇帝は劉聡ではなく劉曜である（三崎良章『五胡十六国 中国史上の民族大移動』新訂版、東方書店、二〇一二年、六〇頁）。

（50）苻健が前秦を建国して長安を都としたのは、皇始元（三五一）年である（注（49）前掲三崎良章『五胡十六国 中国史上の民族大移動』八七頁）。

（51）後秦の姚萇（ようちょう）が長安を都としたのは建初元（三八六）年で、この時、長安を常安に改称している（注（49）前掲三崎良章『五胡十六国 中国史上の民族大移動』一一〇～一一一頁）。

（52）このほか、西燕の慕容泓（ぼようおう）が燕興元（三八四）年に長安を都としている（注（49）前掲三崎良章『五胡十六国 中国史上の民族大移動』九九～一〇〇頁）。

(53) 赫連勃勃は、オルドスを主な支配領域とする夏の建国者である。夏はオルドス中心地の統万城を都とし、赫連勃勃はここから軍を発して昌武元（四一八）年に東晋から長安を奪い、皇帝位に即いた。赫連勃勃は長安を獲得したが、北魏の攻撃を恐れて従前のように統万城を都とし、長安には南台を置いた。なお、南台に駐屯したのは赫連昌ではなく、その兄の赫連瑱で、大将軍・雍州牧・録南台尚書事の肩書であった（『晋書』巻一三〇赫連勃勃載記、注（49）前掲三﨑良章『五胡十六国 中国史上の民族大移動』一一六～一二〇頁）。

(54) 四二〇年は東晋の元熙二年で、恭帝が劉裕に帝位を譲り、劉宋が成立した年である。これより斉・梁・陳へと王朝の交替する南朝が始まる。ただし、華北では五胡諸国の争う五胡十六国時代が、延和五（四三九）年の北魏の華北統一まで続く。したがって、南北朝の対峙する形勢となるのは、四三九年である。

(55) 「永熙」は西魏の元号ではなく、北魏の元号である。永熙三（五三四）年に洛陽から長安に移った孝武帝は北魏最後の皇帝で、その年のうちに殺害されている。長安を都とする西魏が建国されたのは、大統元（五三五）年である。西魏の長安における京兆尹設置については、いかなる史料に基づいたか不明である。『周書』巻四五儒林伝・盧光伝に、「魏廃帝元年、加車騎大將軍・儀同三司、除京兆郡守、遷侍中」とあり、西魏の廃帝元（五五二）年に京兆郡守の官のあったことが確認される。また、厳耕望氏は、『周書』巻四明帝紀の「〔明帝二（五五八）年三月〕改雍州刺史爲雍州牧、京兆郡守爲京兆尹」によって北周長安に京兆尹が設置されたことを指摘するが、西魏については何ら触れていない（厳耕望『中国地方行政制度史』乙部 魏晋南北朝地方行政制度下冊、中央研究院歴史語言研究所、一九六三年、六〇三頁）。これらのことから、西魏から北周の初め（北周の建国は孝閔帝元《五五七》年）にかけて長安とその周辺の行政を担当したのは、京兆郡守であったと思われる。

(56) 北周の都の長安については、考古調査結果を踏まえ、前漢長安城の東北部が宮城として利用されていたことが指摘されている。北周長安城については、劉振東「西漢長安城的沿革与形制布局的変化」（注（39）前掲『漢長安城遺址研究』《初出

二〇〇六年》、内田昌功「北周長安宮の空間構成」（『秋大史学』第五五号、二〇〇九年）、同「北周長安宮の路門と唐大明宮含元殿―殿門複合型建築の出現とその背景―」（『歴史』第一一五輯、二〇一〇年）、同「隋唐長安城の形成過程―北周長安城との関係を中心に―」（『史朋』第四六号、二〇一三年）、村元健一「北朝長安の都城史上の位置づけについて」（同著『漢魏晋南北朝時代の都城と陵墓の研究』汲古書院、二〇一六年《初出二〇一三年》）を参照されたい。

(57) 「関」は「開」の誤り。なお、開皇二年は西暦五八二年である。

(58) 「源」は「原」の誤り。

(59) ここでは、隋唐長安城の建設について述べている。開皇二（五八二）年六月、隋の文帝は「新都」造営の詔を下し、一二月に新都を「大興城」と命名している。開皇三（五八三）年三月には、宮城、皇城（諸官衙を囲む城）、坊（囲壁居住区画）、市（市場）など、外郭の城壁を除くほとんどの部分を作り終え、文帝が大興城の宮城に入っている（張永禄『唐都長安』増訂本、三秦出版社、二〇一〇年、一七～二一頁）。「竜首源（ママ）の地に新に皇城を営」んだというのは、新都造営の詔に「龍首山川原秀麗、卉物滋阜、卜食相土、宜建都邑、定鼎之基永固、無窮之業在斯」（『隋書』巻一高祖紀一）とあるように、渭水南の竜首原上に大興城を造営したことを述べているのであろう。

(60) 「大興府」は、「大興県」の誤りである。本県は開皇三（五八三）年に大興城内に設置された。雍州の設置も開皇三年である。煬帝の大業三（六〇七）年には雍州を京兆郡に改め、長官として京兆尹を置いている（『隋書』巻二九地理志上・京兆郡）。

(61) 隋唐長安城を構成した県は、隋では大興・長安両県で、初め雍州に属し、後に京兆郡に属した。武徳元（六一八）年に唐王朝が開かれると大興県は万年県に改められ、長安県と共に雍州に所属した（『隋書』巻二九地理志上・京兆郡、『旧唐書』巻三八地理志一・十道郡国・関内道・京兆府）。

(62) 石割氏は、開元元（七一三）年の京兆府管轄県の数を二二とする。愛宕元氏は文献記載の京兆府管轄県の数を整理してい

る。それによれば、行政区画の改編に応じて二三県、二四県、二〇県の三種の史料が存在する（愛宕元「唐代京兆府の戸口推移」同著『唐代地域社会史研究』同朋舎出版、一九九七年《初出一九八六年》）。

（63）楊鴻年氏は諸文献の記事を照合し、隋唐長安城の称謂を検討している。それによれば、唐では長安城と称し、また、京師城あるいはこれを短縮して京城と呼んだ。天宝元（七四二）年に西京と称し、至徳二（七五七）載に中京に改め、上元二（七六一）年に西京に戻した。宝応元（七六二）年に京兆府（上都）、河南府（東都）、鳳翔府（西都）、江陵府（南都）、太原府（北都）の五都を定めた時に上都と呼ばれるようになったという。石割氏の述べるところとほぼ合う（楊鴻年『隋唐両京考』武漢大学出版社、二〇〇五年、三三～三五頁）。

（64）久保田和男氏によれば、唐の最末期、軍閥の李克用や李茂貞が長安附近に割拠し、昭宗を脅かした。そこで、昭宗は天復四（九〇四）年正月に都を洛陽に遷した。遷都の際、長安の宮殿・官衙・家屋等は解体のうえ黄河を流され、戦乱で荒廃していた洛陽の復興に充てられた。その結果、長安は廃墟と化した。当時の唐王朝は、もはや軍閥の朱全忠の傀儡でしかなく、天祐四（九〇七）年に哀帝が朱全忠に帝位を譲り、唐は滅亡した（注（28）前掲久保田和男「五代宋初の首都問題」）。石割氏は天祐元年に「長安の設備を舟にて洛陽に移し」たとするが、この年は四月に天復から天祐に改元されている。遷都とそれに伴う用材の運搬は正月に行われているので、天復四年とすべきである。

（65）後梁は開平元（九〇七）年に建国した際、唐の京兆府を大安府に改め、佑国軍節度使を設置している。石割氏の言う「大安軍」は「佑国軍」の誤りである（『旧五代史』巻三梁書三・太祖紀、『資治通鑑』巻二六六後梁紀一・開平元年）。

（66）後唐は同光元（九二三）年の建国時に後梁の大安府を西京京兆府に改めている（『旧五代史』巻三〇唐書六・荘宗紀第四・同光元年、『資治通鑑』巻二七二後唐紀一・同光元年）。「西京兆府」ではない。

（67）後晋は、後唐と同様に京兆府を置いている（『旧五代史』巻七七晋書三・高祖紀三・天福三年）。後晋が廃したのは、長安の「西京」の号である。長安に替わって西京となったのは洛陽で、東京は開封であった（『旧五代史』巻七七晋書三・高祖

紀三・天福三年、『新五代史』巻六〇職方考三・州譜）。

(68) 北宋は長安を京兆府とし、初め陝西路の治所としたが、後に陝西路を永興軍路に改めた。京兆府には永興軍節度使が置かれていた。石割氏は京兆府を陝西省の治所とするが、地方行政区画名としての省が現れるのは、元の行中書省からである（『読史方輿紀要』巻五二陝西一、同巻五三陝西二）。

(69) 一一二七年（北宋：靖康二年、金：天会五年）は、靖康の変で北宋が金に滅ぼされ、華北が金の領域となった年である。同年（紹興元年）、江南の地に南宋が建国された。

(70) 「総督府」は「総管府」の誤り。金の時代の長安は京兆府路に属し、京兆府と呼ばれていた。皇統二（一一四一）年には、総管府が設置されている（『金史』巻二六地理志下・京兆府路）。

(71) 一二三四年（モンゴル：太宗六年、金：天興三年）は、モンゴルが金を滅ぼした年である。

(72) 元の時の状況は、おおむね石割氏の述べる通りである。初め京兆府を設け、中統三（一二六二）年、ここに陝西四川行省の治所を置いた。至元一六（一二七九）年に京兆府を安西路総管府に改め、同二三（一二八六）年、四川に行省を置き、陝西行省の治所とした。皇慶元（一三一二）年には安西路を奉元路に改めた。「安西路総督府」は、「安西路総管府」の誤りである。なお、至元一六年は、元が南宋を滅ぼした年である（『元史』巻六〇地理志三・陝西等処行中書省）。

(73) 明が元の奉元路を西安府に改めたのは、洪武元（一三六八）年ではなく、同二（一三六九）年である。この時から西安と呼ばれるようになった。なお、明代の西安府は、陝西行省の治所であった（『明史』巻四二地理志三・陝西、西安市地方志編纂委員会編『西安市志』第一巻 総類、西安出版社、一九九六年、二三五頁）。

(74) 一六四四年（明：崇禎一七年、清：順治元年）は、清が明を滅ぼした年である。

(75) 清代の西安府は、陝西省の治所であった（『清史稿』巻六三地理志一〇・陝西）。

(76) 中華民国二（一九一三）年、清の西安府は廃されて長安県とされた。翌年関中道が成立し、その治所とされたが、同一三

（一九二四）年に関中道は陝西省に改められた。同一七（一九二八）年に西安市が成立したが、同一九（一九三〇）年に長安県に戻され、同三三（一九四四）年に再び西安市とされた（注（73）前掲『西安市志』第一巻、二三九～二四六頁）。

（77）唐長安城内の人口については、従来一〇〇万人あるいはそれ以上と考えられてきた。しかし、一九九〇年代以降、この説に対する再検討が進められており、五〇～六〇万人、七〇万人、八〇万人説が提示されている。この問題に関する研究史については、妹尾達彦「唐長安人口論」（『中国古代の国家と民衆』編集委員会編『堀敏一先生古稀記念 中国古代の国家と民衆』汲古書院、一九九五年）、張天虹「再論唐代長安人口的数量問題—兼評近一五年来有関唐長安人口研究」（『唐都学刊』二〇〇八年第三期）を参照されたい。

（78）「西安（長安）沿革」では一二キロとする。王仲殊氏は、「今西安市区西北約一〇公里」とする（王仲殊「漢長安城考古工作的初歩収穫」注（39）前掲『漢長安城遺址研究』《初出一九五七年》）。

（79）「楊」は「陽」の誤り。

（80）前漢高祖の五（前二〇二）年に帝位に即いた高祖は、長安を都に定めた。これに対し、山東出身の臣下たちは洛陽奠都を主張した。しかし、高祖はこれを聞き入れず、櫟陽に行幸して前漢長安城宮殿の完成を待ち、高祖七（前二〇〇）年に長安城に入った（注（37）前掲佐藤武敏『長安』三九～四三頁）。

（81）漢長安城遺址の規模は、考古調査によれば東壁六〇〇〇メートル、西壁四九〇〇メートル、南壁七六〇〇メートル、北壁七二〇〇メートルで、周回二五・七キロである。城壁の残高は十余メートルである。城門の数は一三ではなく、四面各三門で合計一二門である（注（39）前掲劉慶柱「漢長安城的考古発現及相関問題研究—紀念漢長安城考古工作四十年」）。

（82）前漢長安城の北壁・南壁の形状がいびつな理由については、以前からここにあった秦の離宮を宮殿に再利用したこと、長安城の北を流れる渭水の流路の制約を受けたためと考える研究者が多い。ただ、最近では、長安城とその周辺の精密な測量により、直接的な理由が指摘されている。すなわち、城壁をほとんど同じ等高線上に築くことで、建設工事の労力を最

小限に止めると共に、城壁が低い土地にかかって城外の地面が城壁より高くなることを避けたためとする説である（董鴻聞・劉起鶴・周建勛・張応虎・梅興銓「漢長安城遺址測絵研究獲得的新信息」『考古与文物』二〇〇〇年第五期）。

（83）注（41）で述べたように、王莽期の長安城が赤眉の乱で破壊されたのは事実であるが、これに先立つ王莽の前漢王朝簒奪によって長安城が「衰微」したとは思えない。村元健一氏によれば、王莽は長安城外に郊壇・明堂・九廟を建設して礼制を整える一方、儒家の礼制に則った都城を洛陽に造営して長安と洛陽の両都制を取ろうとしていた。しかし、その構想が実現する前に新は滅亡したという。つまり、王莽期の長安城には、礼制施設が整備されていたのである（村元健一「前漢長安の変容」注（56）前掲『漢魏晋南北朝時代の都城と陵墓の研究』《初出二〇〇八年》）。

（84）注（64）で指摘したように、唐の洛陽遷都に伴う用材の運搬は、天復四（九〇四）年正月に行われている。したがって、「天祐元年」ではなく「天復四年」とすべきである。

（85）「祐国軍」は「佑国軍」の誤りである。

（86）天復四（九〇四）年の洛陽遷都後に佑国軍節度使に任命された韓建は、宮殿が解体されるなどして廃墟と化していた長安城の宮城と外郭の城壁を取り壊し、皇城のみを使用することにした。皇城のいくつかの門を塞いでこれを「新城」と呼び、東西の門外にはそれぞれ小城を設けて県の治所を置いた。新城が「奉元城」呼ばれるようになったのは、元になってからである（『読史方輿紀要』巻五三陝西二・西安府所引『元図経』）。

（87）石割氏は言及していないが、元の奉元城外東北には小城が構築され、離宮とされていた。そのありさまは、一三世紀にここを訪れたマルコ・ポーロの『東方見聞録』に記されている（妹尾達彦「清代西安府の都市構造—光緒一九年（一八九三）測絵「西安府図」をもとにして—」『イスラムの都市性・研究報告』研究報告編第四一号、一九八九年）。

（88）元の勢力を駆逐した明は、洪武二（一三六九）年に奉元路を西安府に改めた。当時の西安府は明の版図の西北部に位置しており、軍事的重要性が高かった。そこで、都督僉事の濮英によって西安府城（元の奉元城）の北面と東面が増築され、

東西三四〇〇メートル、南北二六〇〇メートルの規模に拡張された。また、拡張された城内の東北隅には秦王朱㷭（しゅそう）の駐屯する秦王城が建設された。明西安府城がすなわち現在残る西安城の遺構である（武伯綸『西安歴史述略』増訂本、陝西人民出版社、一九八四年《初刊一九五九年》二五四～二五七頁、注（87）前掲妹尾達彦「清代西安府の都市構造―光緒一九年（一八九三）測絵「西安府図」をもとにして―」）。

（89）東西南北の各門を通る幹線の交わる地点に建設されたのは、鼓楼ではなく鐘楼である（注（88）前掲武伯綸『西安歴史述略』二五六～二五七頁、注（87）前掲妹尾達彦「清代西安府の都市構造―光緒一九年（一八九三）測絵「西安府図」をもとにして―」）。

（90）四門外の郭城とは、関城である。関城は、城門の外側に抜ける幹線に沿って拡大した市街地を囲む城である。東の長楽門を通る幹線は都の北京に繋がっていたため、門外一帯で商業が発達した。そこでここに東関が建設された。西関・南関・北関は明末の反乱による被害を防ぐため、崇禎九（一六三六）年に築かれた（注（87）前掲妹尾達彦「清代西安府の都市構造―光緒一九年（一八九三）測絵「西安府図」をもとにして―」）。

（91）「満洲城」とは、俗に満城と呼ばれた駐坊城である。この城には満州族・モンゴル族の八旗兵とその家族が居住し、漢族の居住は許されなかった。建設されたのは清初の順治元（一六四四）年で、明代の西安府城の北壁と東壁を利用し、北壁の安遠門から南へ鐘楼に至るラインを西壁とし、鐘楼から東へ東壁の長楽門に至るラインを南壁として新たに城壁を築いた。その規模は東西約二〇〇〇メートル、南北約一五〇〇メートルで、西安府城内のほぼ三分の一を占めた（注（88）前掲武伯綸『西安歴史述略』二五七頁、注（87）前掲妹尾達彦「清代西安府の都市構造―光緒一九年（一八九三）測絵「西安府図」をもとにして―」）。

（92）病没した父の武王を継いで幼少で即位した成王は、周公旦に殷の故地を経略させた。周公旦が統治の足掛かりとして洛陽に建設したのが、王城と成周である。『漢書』巻二八上地理志上・河南郡によれば、西に築かれたのが王城で、東のそれが

成周である。前者を現在の王城公園一帯、後者を漢魏洛陽城遺址に比定する説があるが、これらの場所から西周時代の遺跡はあまり見つかっていない。西周時代の遺跡が集中する場所は、現在の洛陽市街地を南流する瀍河沿いであるが、現在までのところ城壁の遺構は確認されていない（佐原康夫「周礼と洛陽」奈良女子大学二一世紀ＣＯＥプログラム古代日本形成の特質解明の研究教育拠点編『古代都市とその形制』奈良女子大学二一世紀ＣＯＥプログラム古代日本形成の特質解明の研究教育拠点、二〇〇七年、段鵬琦『漢魏洛陽故城』文物出版社、二〇〇九年、二一～二三頁）。なお、石割氏が築城の年とする紀元前一一〇八年については、注（32）で指摘したように西周建国年に諸説あり、当否を論じることができない。

（93）東周の都となったのは東周王城遺址で、洛陽市中心部を流れる澗河の東岸に位置する。東周王城遺址の規模は、東壁残長一八〇〇メートル、南壁残長八〇〇メートル余、北壁二八九〇メートルで、西壁は曲折している。城内中央部には、漢代に造営された河南県城の遺跡がある（聶曉雨「従考古発現看洛陽東周王城的城市布局」『中原文物』二〇一〇年第三期）。

（94）敬王元（前五一九）年に東周の敬王が狄（「翟」とも表記）泉に移った経緯は、以下の通りである。景王二五（前五二〇）年、景王が後嗣を定めないまま死去したため、王子の間で後継争いが生じた。国人たちは景王の長子を後継ぎとしたが、王子朝がこれを殺した。その後、王子朝と晋が介入して擁立した敬王との間で争う事態となり、敬王は抗争の続く王城を避けて東へ逃れ、狄泉を拠点とした。狄泉のあった場所は、現在の漢魏洛陽城遺址内である（注（92）前掲佐原康夫「周礼と洛陽」、桑永夫『漢魏洛陽故城編年史』修訂本、中州古籍出版社、二〇一三年、一一～一二頁）。

（95）石割氏は、敬王の移った洛陽城の規模を東西六里、南北九里とする。しかし、考古調査によれば、漢魏洛陽城がこの規模にまで拡大されるのは、秦代である。漢魏洛陽城は、初め西周時代に中央部が築かれ、次いで東周の敬王の時に前注の狄泉を含む北側が増築され、秦代に至って南側が増された。この時、「九六城」と呼ばれる東西六里、南北九里の城が形成されたのである（中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊「漢魏洛陽故城城垣試掘」杜金鵬・銭国祥主編『漢魏洛陽城遺址

研究』科学出版社、二〇〇七年《初出一九九八年》）。

(96) 赧王五九（前二五六）年、東周は秦の攻撃を受けて滅亡し、王城は秦の所有に帰した。さらに、秦は荘襄王元（前二四九）年に呂不韋を派遣して成周を収めた。この時、成周は拡張され、ここに三川郡の治所と管下の洛陽県が置かれ、王城には河南県が置かれた（注（92）前掲佐原康夫「周礼と洛陽」、注（94）前掲桑永夫『漢魏洛陽故城編年史』一五頁）。

(97) 曹魏の明帝の時、漢魏洛陽城に太極殿等の壮麗な宮殿が建設された。ただし城門は、後漢時代に既に一二門とされていた。曹魏明帝による宮室造営については、福原啓郎「三国魏の明帝」（同著『魏晋政治社会史研究』京都大学学術出版会、二〇一二年《初出二〇〇〇年》）、安田二郎「曹魏明帝の「宮室修治」をめぐって」（『東方学』第一一一輯、二〇〇六年）、佐川英治「「奢靡」と「狂直」―洛陽建設をめぐる魏の明帝と高堂隆」（同著『中国古代都城の設計と思想―円丘祭祀の歴史的展開―』勉誠出版、二〇一六年《初出二〇一〇年》）を参照されたい。

(98) 匈奴の劉曜が洛陽の宮殿等に火を放ち、皇太子・宗室以下三万人余を殺害し、陵墓を発いたのは、永嘉五（三一一）年である。この時、懐帝は匈奴に拉致されて同七（三一三）年に殺害された（注（46）前掲福原啓郎『西晋の武帝 司馬炎』三一六～三一八頁）。

(99) 太和一八（四九四）年、北魏の孝文帝は遷都の詔を発して平城（現在の山西省大同市）から洛陽に遷都することを宣言し、同年、洛陽に入っている（『魏書』巻七下高祖紀下）。なお、北魏の遷都した洛陽は、後漢・曹魏・西晋の洛陽城で、現在の漢魏洛陽城遺址に当たる。

(100) 東西二〇里、南北一五里の規模は、後漢から西晋までの洛陽城の外側に増された外郭を含んだものである。外郭の増築時期は、宣武帝の景明二（五〇一）年である。北魏洛陽城の外郭の構造については、角山典幸「北魏洛陽城の平面プランと住民の居住状況について」（『人文研紀要』《中央大学人文科学研究所》第七二号、二〇一一年）を参照されたい。

(101) 注（55）で触れたように、北魏政界の実力者高歓の圧迫に耐えかねた孝武帝は、永熙三（五三四）年に長安の宇文泰を頼っ

て出奔した。しかし、宇文泰はその年のうちに孝武帝を殺害し、翌年、文帝を帝位に据えた。長安を都とするこの政権は、西魏と呼ばれる。一方、孝武帝を失った高歓は孝静帝を擁立し、永熙三年を天平元年に改めて鄴（現在の河北省臨漳県）への遷都を強行する。この政権は東魏と呼ばれる。

（102）「東京城」とは隋唐洛陽城で、漢魏洛陽城遺址の西約一五キロに位置した。大部分の遺構は、現在の洛陽市街地の下に埋もれている。建設作業は、煬帝の即位した大業元（六〇五）年の三月に始まり、大業二（六〇六）年正月に終了した（呉迪・李徳万・葉万松『古都洛陽』杭州出版社、二〇一一年、一九〇～一九一頁）。「洛陽河南の二城を併わせ」るという表現は分かりづらいが、『読史方輿紀要』巻四八河南三・河南府に、「隋大業元年改營東京、城前直伊闕之口、後依邙山之塞、東出瀍水之東、西踰澗水之西、洛水貫其中、象河漢也、河南・洛陽於是合而爲一」とあることを踏まえているのであろうか。

（103）ここに記される隋唐洛陽城の規模は、『読史方輿紀要』巻四八河南三・河南府を参照したと見られる。数値は同書記載のそれと全く同じである。考古調査によって知られる隋唐洛陽城の規模は、東壁七三一二メートル、西壁六七七六メートル、南壁七二九〇メートル、北壁六一三八メートルで、合計は二七・五キロである（中国社会科学院考古研究所編著『隋唐洛陽城 一九五九～二〇〇一年考古発掘報告』文物出版社、二〇一四年、二八～三七頁）。石割氏の言う「外城周囲五二里九六歩」は二九・三キロに換算され、やや開きがある。

（104）唐代の洛陽城は東都と称されたが、そのように呼ばれなかった時期もある。武徳元（六一八）年に唐王朝が開かれると、隋の呼称を継承して東都とされたが、同六（六二三）年に洛州に改称された。太宗は洛陽を重視し、貞観六（六三二）年に洛陽宮に改め、次の高宗は顕慶二（六五七）年に東都に戻した。しかし、武則天が光宅元（六八四）年に神都に改め、天授元（六九〇）年に周を建国するとここに都を置いた。神竜元（七〇五）年に唐王朝が再開されると東都の号が復活した。玄宗の天宝元（七四二）年に東京に改め、粛宗の上元三（七六二）年に東都に復した（『唐両京城坊考』巻五東京）。

（105）開平元（九〇七）年に建国した後梁は開封を東都とし、洛陽を西都とした。同三（九〇九）年、太祖は開封から洛陽に移

り、太廟・郊祀施設などを整備した（李久昌『国家・空間与社会―古代洛陽都城空間演変研究』三秦出版社、二〇〇七年、一〇二～一〇三頁）。

（106）同光元（九二三）年に国を建てた後唐は、同年後梁を滅ぼして洛陽に都を置き、洛京・東都と号した。また、長安を西都、太原（現在の山西省太原市）を北都、魏州（現在の河北省魏県）を鄴都とした（注（28）前掲久保田和男「五代宋初の首都問題」）。

（107）清泰三（九三六）年、後唐の節度使であった石敬瑭は、後晋を建国して元号を天福に改めた。建国当初、後晋は後唐と同様に洛陽を都としたが、同年開封に遷都し、洛陽は西京とされて太廟・郊祀施設が置かれた。天福三（九三八）年に開封の号は東京に改められた。なお、「石敬糖」の「糖」は「瑭」の誤りである。また、石割氏は、五代後期の洛陽の状況に言及していないので、以下に補う。天福一二（九四七）年建国の後漢は、後晋と同様に東京開封を都とし、西京洛陽を太廟・郊祀施設を安置する都とした。後周も広順元（九五一）年の建国当初は、東京開封に都を置き、西京洛陽に太廟・郊祀施設を置いた。しかし、広順三（九五三）年に太廟を開封に移設した。また、円丘・社稷壇を開封に建設した（注（28）前掲久保田和男「五代宋初の首都問題」、注（105）前掲李久昌『国家・空間与社会―古代洛陽都城空間演変研究』一〇三～一〇四頁）。

（108）北宋時代の洛陽は、都の開封が東京開封府と称されたのに対し、西京河南府と呼ばれた。また、東京・西京のほか南京応天府（現在の河南省商丘市）、北京大名府（河北省大名県）が設置された（注（105）前掲李久昌『国家・空間与社会―古代洛陽都城空間演変研究』一〇四頁）。

（109）「年」字が欠落している。

（110）北宋に攻め入った金は洛陽城を焼き払ったが、廃墟のまま放置したのではない。金は初め北宋の西京の号を廃して河南府とし、後に中京金昌府とした。正大四（一二二七）年には中京城を築いている（『金史』巻二五地理志中・南京路・河南府、

同書巻一七哀宗紀上、『元河南志』宋城古蹟）。

（111）元は、金の中京城に河南府路とこれに統属する河南府の治所を置いた（『元史』巻五九地理志二・河南江北等処行中書省、注（102）前掲呉迪・李徳万・葉万松『古都洛陽』二六七頁）。

（112）明の建国された洪武元（一三六八）年、洛陽に河南府が置かれた。元の河南府城を修築して周回約五キロとし、東壁に建春門、西壁に麗景門、南壁に長夏門、北壁に安喜門を設けた。この城は、李自成の農民反乱軍によって崇禎一四（一六四一）年に破壊されたが、清が修復し、中華民国期に襲用された（注（102）前掲呉迪・李徳万・葉万松『古都洛陽』二六七頁）。

（113）清代の洛陽は河南省に属し、河南府と呼ばれた（『清史稿』巻六二地理志九・河南・河南府）。

（114）中華民国二（一九一三）年に河南府は廃され、洛陽県とされた（史為楽「洛陽市」陳橋駅主編『中国都城辞典』江西教育出版社、一九九九年、四一～四二頁）。

（115）「氾」は誤りで、「汜」が正しい。現在の行政区画名は、河南省滎陽市汜水鎮である。

（116）「三崤」とは、崤山の別名である（『読史方輿紀要』巻四八河南三・永寧県・崤山）。

（117）唐長安城の周回距離については、『長安志』巻七唐京城一に、「外郭城。……周六十七里」とあり、六七里は三七・五キロに換算される。なお、考古調査で判明した唐長安城の規模は、東西九七二一メートル、南北八六五一・七メートル、周回三六・七キロである（注（59）前掲張永禄『唐都長安』三九頁）。

（118）大興城の坊数は、五つではない。当初一〇九坊であったが、後に仏寺の建立に伴って外郭西南隅の和平・永陽両坊が統合されて改めて永陽坊とされたため、一〇八坊に減少した。なお、唐長安城における坊数の変化は次の通りである。竜朔二（六六二）年に長安城外郭の北側に大明宮が建設されると、宮南面に丹鳳門街を通すため、二坊が分割されて一一〇坊に増加した。その後、外郭東北隅の永福坊の地が禁苑に入れられ、先天年間（七一二～七一三）には諸王の居住地とされたた

め、一〇九坊となった。開元二（七一四）年には、隆慶坊の地が興慶宮とされたため、一〇八坊に減少した。宣宗の時、外郭東南隅の芙蓉園から北に位置する新昌坊の青竜寺に直接行けるように、その間の四坊を東西に分割したため、一一二坊に増加した（辛徳勇『隋唐両京叢考』三秦出版社、二〇〇六年、八「大興城的坊数及其変化和城東南隅諸坊」）。

(119) 坊内には、「街」と呼ばれる道が東西または東西南北に通り、坊は二分割あるいは四分割されていた。皇城南の比較的小規模な坊は南北に二分割され、宮城・皇城東西の大規模な坊は東西南北に四分割されていた。石割氏の言う「巷」は、二分割ないし四分割された坊内の区画内を通る路地を指す（注（59）前掲張永禄『唐都長安』一八七～一八九頁）。

(120) 「太上天皇」ではなく、「太上皇帝」（高祖）である。

(121) 梨園とは、開元二（七一四）年に玄宗が設立した、宮女を対象とする楽舞技芸の教習施設である。大明宮内の会昌殿附近に位置した（『長安志』巻六宮室四・唐上・長生殿教坊所引『唐紀』、『雍録』巻九苑囿・梨園）。

(122) 興慶宮は、東市の東北の区画に位置した宮殿区で、もとは隆慶坊であったのを玄宗が改めた。沈香亭は興慶宮内東部に位置し、玄宗と楊貴妃が宴を張り、花を愛でた所である（注（59）前掲張永禄『唐都長安』一五七頁）。李白の「清平調」は、『全唐詩』巻二七雑曲歌辞、巻一六四李白四、巻八九〇詞二に収められている。

(123) 「大極宮」は「太極宮」の誤りである。

(124) 石割氏は、唐の玄宗の頃の長安の戸数を三〇万としているが、『新唐書』巻三七地理志一は、玄宗の天宝元（七四二）年の京兆府の戸数を三六万二九二一とする。京兆府は長安城内外の広域行政を管掌したのであるから、『新唐書』に従えば長安城内の戸数は三〇万を下回ると見られる。妹尾達彦氏は、戸籍に登録される長安城内の戸数を六万数千と推計し、このほかに行政側が把握していない科挙応試者・外国人などが存在したことを指摘する（注（77）前掲妹尾達彦「唐長安人口論」）。

(125) 「西安築城沿革」では「約二八キロ」とする。実際は注（81）で述べたように、二五・七キロである。

(126) 前漢長安城遺址の規模は注（81）を参照。なお、城壁の厚さは、底部で約一六メートルである（注（39）前掲劉慶柱「漢

長安城的考古発現及相関問題研究—紀念漢長安城考古工作四十年」)。

(中央大学文学部兼任講師)